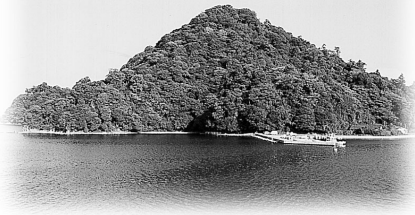


十神山



# 会報 安来節

YASU GI BUSHI

発行所 安来節保存会

〒692-0064  
島根県安来市古川町534  
TEL 0854-28-9988  
FAX 0854-28-9393  
http://www.y-hozon.com/  
E-mail:admin@y-hozon.com

## 上位昇格者

11月15日に開催された安来節保存会代議員会を経て、平成26年度の上位昇格者と被表彰者が決定致しました。  
今回、准名人に4名、大師範に9名の方が昇格されました。おめでとうございます。来年の1月10日の唄い初め会において、免状・表彰状の授与と昇格披露を行います。

## 准名人(四名)

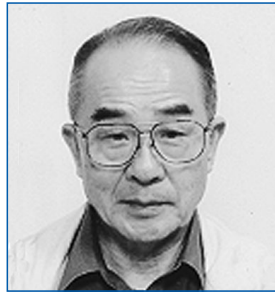
藤江英明  
唄の部(湖陵)



渡部二郎  
絃の部(松山)



野坂英明  
絃の部(石見)



安部寿樹  
踊の部(松山)



## 大師範(九名)

唄 佐々木きぬ糸

(本部道場)

鼓 吉野和夫

(本部道場)

銭太鼓 中井博子

(本部道場)

絃 一字川耕士

(本部道場)

唄 坂本 稔

(加茂)

鼓 田中輝夫

(松江)

唄 内藤朋子

(関西)

踊 三本善正

(松山)

踊 一字川俊栄

(東海)

(総会資料名簿順)

## 会員表彰者

(三十四名)

- 三保利子 (本部道場)
- 持田順子 (本部道場)
- 藤井幸雄 (本部道場)
- 竹内久雄 (出雲)
- 岡田禮子 (石見)
- 安井道子 (大田)
- 陶山めぐみ (加茂)
- 三島春美 (神門)
- 大國絵梨香 (湖陵)
- 吾郷静子 (湖陵)
- 伊藤敏行 (宍道)
- 足立憲一 (大社)
- 村田満子 (津和野)
- 藤原リキ子 (仁多)
- 三浦三枝 (浜田)
- 三明和子 (浜田中央)
- 昌子健一 (斐川)
- 宮田ケイ子 (北陽)
- 山本多恵子 (益田)
- 岡田良子 (松江)
- 小村澄江 (松江)
- 角佳典 (尾高)
- 清水静代 (東伯)
- 宮本恒子 (鳥取)
- 稲田真人 (米子)
- 林原武實 (米子)
- 原田松子 (米子中)
- 楠部有希子 (江田島能美)
- 坂口誠 (江田島能美)
- 景山弘子 (広島玉実)
- 高下健二 (広島東)
- 田中綾子 (松山)
- 大庭勝美 (関西)
- 下地重利 (神戸)

## 新役員決定

任期 平成25年10月1日～平成27年9月30日

このたびの役員改選に伴い、新役員が決定しました。安来節がますます普及・発展するよう新役員の方々のご尽力に期待し、会員の皆様のご協力をお願いいたします。

会長 近藤宏樹 (市長)

副会長 新田典利 (副市長)

専務理事 金山満輝 (市議会議長)

常務理事 成相二郎

理事 内田修次 (市産業振興部部长)

理事 青砥治朗 (商工会議所)

理事 渡部お糸 (家元)

理事 岩田拓郎 (審査長)

理事 作野幸憲 (指導部長)

理事 西村利美 (市議会議員)

理事 富田幸男 (本部プロック)

理事 中井亨 (米子プロック)

理事 山根信重 (出雲プロック)

理事 大石義富 (益田プロック)

監事 渡部弘充

資格審査員 中本實

仲前長治

安部順吉

渡部お糸

上代安夫

原代文男

佐々木偉市

出雲正之助

矢倉哲郎

富田徳之助

一字川勤

渡部孝夫

越野幸吉

須野善夫

榎野茂

石岡暉

石川弘一

指導部員

野坂芳男

伊藤守男

原藤

濱崎淳

小泉正人

安達順吉

松尾益男

松村英興

野々村府美

資格審査員

仲前長治

安部順吉

渡部お糸

上代安夫

原代文男

佐々木偉市

出雲正之助

矢倉哲郎

富田徳之助

一字川勤

渡部孝夫

越野幸吉

須野善夫

榎野茂

石岡暉

石川弘一

野坂芳男

伊藤守男

原藤

資格審査員

仲前長治

安部順吉

渡部お糸

上代安夫

原代文男

佐々木偉市

出雲正之助

矢倉哲郎

富田徳之助

一字川勤

渡部孝夫

越野幸吉

須野善夫

榎野茂

石岡暉

石川弘一

野坂芳男

伊藤守男

原藤

なお顧問・参与・常任理事も改選されました。

**(有)仁木三味線**  
製造・販売/修理 三味線・鼈甲撥・尺八・太鼓  
〒240-0022 神奈川県横浜市保土ヶ谷区西久保町197-1  
TEL 045(713)4319 FAX 045(741)4796  
HP <http://www.syamisen.com/>

**大小鼓製造卸販売**  
**杉本鼓店**  
住所：島根県松江市馬潟町360-13  
電話・FAX：0852-37-2033  
E-mail：ks36013@web-sanin.co.jp  
※通信販売も致しますので、お気軽にお電話ください。  
修理、下取りもご相談ください。



# 私と安来節

## 出 会 い



資格審査員  
仲前長治  
(米子中支部)

人生はふとした出会いから回想へと移行するものですね。

昭和二十年代、NHKラジオでコンクールの放送をしていた頃、島根県三刀屋町の足本秀春様のお宅へ行きまして、上代茂則先生との初めての出会いでした。その日はコンクールに出場される方の鼓の応援をするのだと稽古される中、唄の指導も非常に優しく、丁寧に教えておられ、感激致し



資格審査員  
石岡邦宏  
(松山支部)

三十歳の中頃、宴会芸にと、どじょうすくい踊りを習い始めました。以前長唄の手解きを受けた事があったので三味線にも取り組みましたが、当時は支部開設前の愛好会だったので身近に指導者も無く、独学の様な集まりでした。二代目安達順吉先生と徳之助先生の共演のソノシートを聞いて音を探って練習しました。支部設立後は資格審査会後の模範演技の時、一番前の席に座って手の動きや撥擲きを見て参考にしました。初段の時、初めて二代目安達順吉先生の指導を受けた際には余りの音色の違いにショックを受け、基本からやり直さねばと録音したテープを何度も聞き返して練習しました。今でも調子の悪い時にはそのテープを聞き直して初心に帰るよう努力しています。

ました。この日、この先生に就いて安来節の勉強をしたいと心に決めました。

さて小生は岡山県阿哲郡本郷村の生まれで、当時岡山県貨物に在職、松江に転勤し、初代砂川清先生に安来節をしながらと誘われて米子支部の長谷川郁純先生の三味線で第一声、その日から気狂いじみた稽古、正に体で唄う安来節にしようと思えました。その後は、二代目出雲愛之助先生等々先輩の方々の唄を聞く事により学び、絃、鼓は見ならぬ成し遂げました。それから日本の祭りの和牛登録共進会、瀬戸大橋開通祝賀会等々のイベントへの参加でも二代目安達順吉さん、三代目愛之助さん、正之助さんとの参加は今も走馬灯のように思いふけます。今後も益々繁栄致す保存会でありまう祈念致します。

今になって「なるほど」と気付く事があり、貴重な宝物です。歌舞伎役者で亡くなられた中村勘三郎さんがテレビインタビューで「芸は教えられて会得するものではなく盗むものである。先ずは師匠の真似をしなさい。師匠そっくりと云われるようになった時、それが型だと、型とは基本であり、それが会得出来た時に自分の型が出来、新しい物が見えてくる。それに挑戦するのが型破りであり、型が出来上がっていない内にあれこれ手を加えたり、変わった事をやるのは型無し」と話しておられました。まさにその通りだと思えます。安来節の三味線は長い歴史の中でほぼ完成されていると云われており、これに変化を付けるのは非常に難しいと思われませんが、近年、新しい試みにチャレンジする方もおられます。流れの良い乗りの良い旋律になるよう期待します。三味の音色と云われますが、音は出ているけれども色の付いていない三味線も耳にします。この味の有る色付けが特に難しく、私自身これから先も追及していく課題の一つです。芸に終わりは無いという気持ちで頑張っています。



指導部員  
伊藤芳男  
(宍道支部)

昭和四十二年に宍道支部に入会させて頂き、唄一級になりました。四十七年に師範に昇格させて頂き、早四十六年が過ぎようとしています。

私が小学校四、五年生頃にラジオ放送で二代目出雲愛之助先生の安来節教室があり「安来千軒名の出た所社日様に十神山 十神山から沖見れば いずくの船かは知らねども せみのもとまで帆を巻いて ヤサホヤサホと鉄積んで上のぼる」と唄われるのを毎週放送を聴いて覚えていました。最初は二代目出雲愛之助様、黒田幸子様、松江 徹様、中でも足本秀春先生の「瀬田の唐橋」を勉強し、それ



指導部員  
原 淳文  
(北陽支部長)

### これからの安来節

平成十一年の会則改正に伴い審査部、指導部が設けられ、指導部員に選任され本年で十五年目を迎え、個人の私見としてこれからの安来節という事を考え、筆をとらせて頂きます。

指導部員に選任されるまでは支部の事、自分の事を中心にして来ましたがそれからは保存会全体の事に身を置くべきと私なりに勉強させて頂きました。保存会創立百周年というすばらしいイベントも開催され二年、安来節の歴史、保存会創設に尽力された多くの方々、今日の安来節保存会の発展に尽くされた先人の方々の苦勞に改めて尊敬を持って感謝すると共に安来節という伝統芸能を次世代の人々に継承するのが私達の務めであると思えます。

から「わたしや出雲の三津浦生まれ」の唄はテープが擦り切れるまで聞いて唄って勉強した唄で自分の十八番だと思っています。足本秀春様の唄声は聞けば聞くほど、情緒味わいのある、あつぷとい歌声です。

温故知新(姿、形を変えないで伝えていく使命である事) 足本秀春様、平田の五條家さん(唄・絃・男踊り) 夫婦漫才師、宍道の新田松次郎さん(絃・大師範) 夫婦漫才師、共に大阪の吉本興業所属でした。いずれも故人です。芸道無窮(芸は行きつく所が無いほど深い)という色紙をもらい、本当にそうだなと思うこの頃です。安来節保存会の皆様方におかれましては新入会員の募集をお願い致します。

功勞者の方、上位昇格者の皆様にも大いに募集を期待する所です。今後、安来節保存会が益々発展されます事と皆様方の御健康をお祈り致します。

唄・絃・鼓・男踊り・錢太鼓と各部門共全国の民謡の中でもすばらしいものがあります。唄の音域、絃の撥擲きと指使いの華麗さ、小鼓大鼓の微妙な音色をかもしだす手捌き、男踊りの美しい中にあるユーモアとパントマイムのようなキレとタメ、錢太鼓のすばらしい踊りと楽器の部分の兼ね合い、どれをとっても他の民謡会にはないものが安来節にはあります。どの部門共、各流派のすばらしい技があります。次世代の人達が流派の許容範囲の中、般にとらわれないのびのびと、されどはみ出さず、もつと自由に伝統芸能である安来節を楽しみ、そして好きになつてもらえるようにするのが私達の務めであり、安来節の発展の為になると考えます。保存会は現在「唄・絃・鼓・男踊り・錢太鼓」の5部門がありますが、微妙な色気と艶やかさ、5〜7人で踊られる時の美しさとすばらしさのある女踊りも部門の一つに加えられたらどうなるだろうと考えます。保存会員が減少傾向にある現在、太鼓と共にこれからの安来節保存会の姿として皆様方に一考していただければ幸いです。



淡路修身  
(和歌山支部)

私は、昭和十四年和歌山市の小さな漁村田野浦で生まれました。瀬戸内海の東南側紀伊水道に面した漁村です。私は小学校一年生の時、終戦を迎えました。当時の田野浦では古い良き習慣が残っていました。たとえば、結婚式の時など嫁入り家具一式は、村の若い衆が担いで行列をなして、新婦の家から新郎宅まで練り歩き、タンス長持の唄を唄って、祝っている光景を幾度も見て、楽しい思い出として、私の脳裡に刻まれました。そして、ご両親、ご両家を祝福する披露宴です。その席で私の母が安来節を唄っていました。私は子供心にも「お母さん上手やなあ、節回しもええわ」と思い、この時、聞いた安来節は忘れる事はありませんでした。いつかは私も母親のように唄ってみたいと夢見ていました。しかし私は長い間、母の唄った安来節の事は忘れてしまっていました。

平成二十三年十月、私七十二歳の時、安来節を覚えた衝動にかられました。それは平成十九年、NHKで放送された「日本民謡フェスティバル」で安来節を唄ってグランプリを獲得したビデオを偶然見てしまったのです。私はビックリしました。「すごい、和歌山出身の方が、どれくらい唄いっぷり、素晴らしい安来節」この先生に教えて頂きたいと思ひ、訪問し、お願いしたところ、弟子入りを許され、丁度二年が経過しました。これから一生涯教えて頂きますよう頑張ります。本年八月十七日の安来節全国優勝大会に行きました。その席上初めて安来節家元四代目渡部お糸様の安来節をお聞きました。本当に見事な安来節でした。感動しました。家元様の心の温かさ、優しさ溢れたお歌でした。「悲しみ乗り越え未来に向かう 東日本に幸あれと」唄い上げる家元様に神々しさを感じました。惚れ込みました。私は七十二歳からのスタートで現在七十四歳ですが、命の続く限り安来節を唄い続けたいと決意しています。



# 安来節フォーラム開催



会員の有志による「出雲街道民謡交流会」が安来節をテーマにしたシンポジウム「安来節の魅力語る会」が9月7日、安来節演芸館で開催され、一般の方を含め、70名の方が参加されました。

参加者からは「時間が足りない、もっと聞きたかった」「もっと多くの人に聞いてほしい」「来年も開催してほしい」などの意見があった。

終了後は交流会が催され、参加者はステージで安来節を体験しながら、安来節の未来を語り合っていた。

## 手拍子をとって

### 楽しむ安来節

―やすき月の輪祭りへのいざない―  
並河 健蔵

今年も旧正月のある日、私も親類縁者の四十数人が安来港に近い割烹・停雲に集まって新春を寿いだ。その席で今回も安来節の一行を招いて民謡の醍醐味を存分に味わった。

三味と鼓の絶妙な「間合い」をもった賑やかな音曲、美しく艶やかな女性の唄声、ときにはしくじつてくれると面白いと思う程に威勢のよい銭太鼓のひびきなどに私たちは目を奪われた。いつの間にか暖かい手拍子の鳴るなかで、安来節のすばらしさを堪能することが出来た。

どじょう揃い踊りは思いがけず女性の踊り手のきびきびしてボーイッシュな所作に魅了された。どじょうを掴んだ彼女が、すかさず近くの席で見惚れている女性客に手を差しのべて、生きたどじょうを手渡そうとする仕様に、客は慌てて身を反らす。類被りの彼女はにっこり笑う。三味と鼓が次の動作を促すように囃したと、踊り手は急いで箆に手を掛けて、やおら前方を見渡す。この所作の何と心地よいことか。そのす速さに私も盃を膳においたまま魅せられてしまった。

安来節の本来の良さは、酒席の宴で客が手拍子をとって共に唄う「座敷芸」であると思う。唄い手と聞き手の間に、えもいえぬ一体感が生れるからだ。客は次第に唄に酔い、唄い手は客の反応を目の当りにして気持ちよく唄えるのだ。

私が座敷芸だというのは、その生成過程にもよるが、マイクや音響効果の完備した大規模な演芸会場と比べての言葉である。現代では、すでに座敷で聞く機会は少なく、大演芸会場での催しが多い。全国優勝大会や都会での興行を見ても分ることである。

とはいえ、この座敷芸はどうしても捨て難いものがある。そこで共に手拍子をとって楽しめる会場はないものか。あるのである。毎年夏に安

来の町を賑わす月の輪神事の夜祭りである。この祭りの会場は「唄の座敷」が町に繰り出したと言っても過言ではない。夏の夜の町全体が人々で賑わうお座敷同様な雰囲気になるのである。

そもそも月の輪神事とは、安来町の盂蘭盆の行事で、毎年八月十四日から十七日までの四日間に催される。今から千三百年余の昔、町の長である語臣猪麻呂が、鰐にかまれて亡くなった愛娘の霊を弔ったという出雲国風土記に由来する町民の伝統行事である。

町内から繰り出す四つの山車を曳きながら鑿や太鼓に笛などの囃子方が賑やかに練り歩く。四晩つづけて遅くまで町は群衆で賑わう。七十余年前の私が幼少の頃の印象は極めて鮮明である。当時は隣の米子市や松江市からやってくる大勢の仁輪加も加わって、夜の町の雑沓の中に足の踏み場もない程の人出であった。

菅笠に揃いの衣装、赤いじゅばんの裾をちらつかせながら歩を進める百数十人の芸者衆の爪弾く三味の音色は、今でも耳元に残っている。また彼女たちの厚化粧とおしろいの匂いが、子供心にも鮮烈であった。

こんな賑わいに安来節の一行が繰り出さない訳がない。戦後、高度経済成長の頃、私の住まいも一役買って、安来節保存会の事務所になった。全国優勝大会に出演した一行が、優勝旗を手に町を練り歩き、町内の舞台で唄を披露したあと、漸く保存会の事務所にとどりつく。誇らしげに華やかな優勝旗をかかげながら、声を張り上げて唄う安来節に、私たちは、ぞっこん聞き惚れたものである。

そんな賑わいを取り戻したいと思う。例えば、全国優勝大会の参加チームの中で、これぞと思われる若い唄い手たちを選んで、月の輪神事の夜祭りに勇んで出演してもらいたい。選ぶ方は、祭りの奉賛金をはじめ青年会議所、ライオンズクラブなど各種団体の協賛を得ることである。聴衆も手拍子をとって迎えることである。おひねりも飛ぶだろう。私は唄い手と聴衆とが一体感をもって盛り上げるのを夢みている。

## 支部情報

### 創立三十周年と明日への思い



広野 正則 (仁多支部)

昭和五十四年三月に民謡教室を開講し、講師を出雲俊之助先生に依頼、併せて加茂支部に新規加入、四年後の五十八年に仁多支部を結成、初代支部長に富田とみお先生に一任、以来三十年「千里の道も一歩から」小さな積み重ねが実り、当支部も今春ささやかながら創立三十周年記念式典を執り行いました。新年度に入り、二代目支部長を深田英治さんにお願ひして支部員一同更なる精進を誓い合ひ祝賀をあげました。今年の安来節全国優勝大会では優勝旗が三本、その内容は特筆物でありました。二年連続の優勝者三人「深田英治さん、糸原彩和子さん、藤原恵太君」師範から少年の二段、三段の部に到るまで種目は違えど夢のような快挙でありました。その他多勢の入賞者もあり、仁多支部は万々歳で取り分け若手の有望株が多士済々で嬉しい限りです。

私達は失敗から学び、成功から学び、学んだものを自分なりに生かしていきたいとの決意のもと、准名人富田とみお先生を師と仰ぎ、ほぼ毎週練習に励んでいます。腕前はまだまだ反省すべき点ばかりです。安来節の技術上達を目指す以上、いつまでも輝いていたい、常に魂に磨きをかけ、テーマを明確にして努力精進して行きたいと思えます。



安藤 毅 (大江戸支部)

私共、安来節保存会大江戸支部は、平成十五年十一月に会員数五十名で設立して以来、今年で十周年を迎えました。十月二十七日には、ご指導戴いた保存会の先生方、背中を押して励ましてくれたご家族やご友人の方々のご出席のもと、十周年記念発表会を開催し、模範演技、安来節、一般民謡を学び、唄い・踊り・語り、楽しい一日を共有いたしました。

設立当初からの会員二十三名を含めて、現会員五十九名は、十を数える教室・グループに属して、安来節の稽古に励んでおります。また、毎月一、二回開催される支部定例会で支部全般の技術向上に努めており、更には、二、三ヶ月に一回位の頻度でお見えたたく保存会の先生方の直接指導を上達の一里塚とし、日々研鑽いたしております。また、私共は地域のボランティア・文化祭等に参加し、唄・踊り・銭太鼓を披露し、参加者に楽しんでいただくとともに会員の拡大に努めております。そして、公益財団法人日本民謡協会に所属し、各種行事に参加し、安来節の普及や自分達の技能向上の励みとしております。



打田 清 (和歌山支部)

和歌山支部は毎年一月十日日本部で開催される恒例の「唄い初め会」から始動する。陸路四〇〇kmをもろとせず毎年参加する。時には豪雪に遭遇し、タイヤチェーンが何度か切損するという辛い体験もしたが、会場では家元四代目渡部お糸先生をはじめ、名人各位の熱演により、その熱気で汗ばむ位である。なかでも出雲愛之助先生の十二支を詠んだ新作編の御披露があり、楽しみの一つである。「聞いてお帰れ 荷物にならぬ」まさに参加した者だけに頂けるお年玉である。我が藤原支部長はそれをいち早く習得し、先生のお許しを得て、県下は勿論、いろんな機会に紹介する。会場からはアンコールの声が掛かるもこれにはアンコ

ールは無しと丁寧にお断り、安来節を身近に感じてもらうリップサービスマも忘れていません。安来節の魔力で島根県と和歌山県が隣接県かの様に感じさせるのである。さて、平成二十六年は和歌山支部創立二十周年を迎える。四月十三日(日)を佳き日と定め、リニョリアルオープンした和歌山県民文化会館に於いて、家元四代目渡部お糸先生のご臨席を賜り「創立二十周年記念発表会」を開催する事に決定しました。永年に亘り御指導頂いた、准名人田村実先生、大師範北村八重子先生への感謝の意を表し、充実した大会にすべく日夜研鑽に励んでいる。皆様方の御来場、御声援の程よろしくお願ひ申し上げます。

初代家元渡部お糸先生は血の滲む稽古を重ね、日本海に向け沖行く船に思いを伝えたと語り継がれている。和歌山支部は紀州灘、太平洋に向け大合唱したい。そして海路で島根県と和歌山県を結びたい。安来節万歳！和歌山支部万歳！



# 支部情報

## 広島支部・広島中支部合併



杉之原悦子 (広島支部長)

この度、平成二十五年十月一日に広島支部と広島中支部が合併する事となりました。支部合併は保存会にとっても初めての事ですが、本部にも快く了解して頂き、感謝致しております。会員の高齢化も進み、人数が減少し、行事を行うにも大変になって参りました。もともと広島中支部は広島支部より独立した支部で、この度両支部の話し合いの結果、合併する事に全員一致で決定致しました。

九月二十七日に親睦会を兼ねた合併式を行い、和気あいあいとした雰囲気の中に、広島支部を皆で盛り立てて安来節の技術向上と発展に努める事を誓いました。

保存会の諸先生方、並びに保存会会員の皆様、今後ともご指導ご鞭撻の程、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



広島支部・中支部合併交流会

# 会員の声コーナー

## 長野県塩尻市の「塩の道」について



棚橋 保 (東京支部長)

長野市 善光寺下の権堂と塩尻市と二ヶ所に踊りの教室を持って早や三年になる。今回は塩尻市について報告させていただきます。

### 第一「長野県の特徴」について

鳥瞰図的に見ておく必要があります。その一、長野県の面積は北海道、岩手県、福島県に次いで四番目に広い。その二、長野県は「海なし県」であり、他に栃木、群馬、埼玉、山梨、岐阜、滋賀、奈良と七県あるその中で一番大きい県である。

その三、長野県は日本の屋根と呼ばれていて、標高三千 m 前後の高い山が四方を囲んでいる。この地勢は諸河川の源をなしており、天竜川、木曾川は南に流れて太平洋に注ぎ、千曲川、犀川の二流は合流して北に走り信濃川となっており、日本海に入っている。県内の平地は、これら諸川の間にあつて千曲川流域は佐久平と善光寺平、犀川流域は松本平、木曾川流域は木曾谷、天竜川流域は伊那谷、諏訪湖を中心とする諏訪盆地等となる。

### 第二「海なし県」の持つ意味

日本の場合は、陸地から塩が産出されないため海水を干して採集していた。したがって海がないという事は、人間の生活に欠く事の出来ない「食塩」を海に接している県の海岸地方から舟と牛・馬に背負わせて県内に運ぶという困難を抱える事を意味する。ここからドラマが始まるといっても過言ではない。

### 第三「塩の道」について

日本海側の糸魚川市から塩尻市まで北塩二〇 km と塩尻市から太平洋側の相良町までの南塩二二〇 km をつなぐ合計三五〇 km の長大な塩の道、日本列島の真ん中を南北に貫く最長最古の塩の道があり、二つのルートで塩が運ばれ、いずれも塩尻で交わる。その終点地が塩尻で「尻」は終点という意味だといわれている。そして今、改めてこの塩の道の風土と歴史と文化を学び直そうと「塩の道会議」が平成七年からスタートしている。

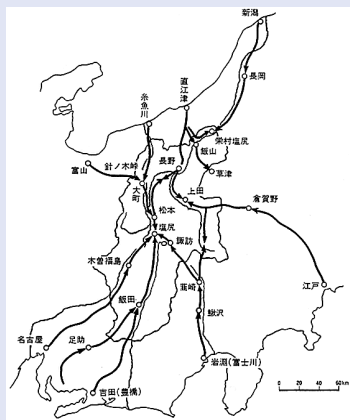
### 第四「塩」について

化学的には塩素ナトリウムとの化合物で、大人一日の食塩の必要量はおよそ十五 g で人間が食べた食塩は体内で塩素とナトリウムに分解され、塩素は体内の水分に溶けて塩酸となり、これが胃中に分泌され胃の中で消化酵素の働きを助けて食物を消化しますが、他方ナトリウムは体内の水分と結合し、なかなか分解されずに体内に長く止まり、結果、水分量が増え、心臓や腎臓に負担がかかり健康障害の原因となり、沢山取るといけないといわれている。

食塩は人間の生活上欠く事の出来ない貴重品であり、ローマ帝国時代は給料の代わりに食塩が役人や軍人に支給されていた。従って現在でも月給取りの事を「サラリーマン」といわれ由縁になっている。これは食塩の事をラテン語で「サラリウム」というのが語源になっている。

### 第五「長野県への塩の移入路」

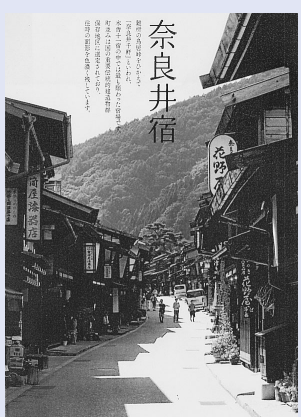
中世以降に限ってみても、最大の塩の生産地であった瀬戸内地方から、北前船などの海路で塩が運ばれた。最寄りの港に陸揚げされ、内陸へ向けて舟で運ばれ、さらに馬の背、牛の背に積んでそれぞれの街道を経由して運ばれた。馬子一人で最多四頭の馬、七頭の牛を引いた。牛馬は一騎(三十貫・一



一三 kg の荷を一日八里(三二 km)の道を歩いた。

### 第六「中山道(もう一つの道)」

江戸幕府は、全国の主要街道を整備する事により、諸大名と農工商民を支配する政策をとったが、江戸を起点とする東海・中山・奥州・日光・甲州の五街道が最も重視されていた。信州塩尻を通過していた中山道は、江戸と京都を結び、東海道に次ぐ街道であった。中山道は江戸から京都まで六九の宿場町があった。うち信濃国には二六宿場があった。宿場町には、大名や武士を宿泊させた本陣・脇本陣や荷物の継立てをする問屋をはじめ、旅籠や茶屋があつて繁栄した。そのうち最も賑わったのが塩尻で、なかでも奈良井宿は現在も往時の面影を色濃く残している。



奈良井宿

以上のように人間に不可欠な塩。その塩を運び、諸物資を文化や信仰や風俗を運んで来たこの南北塩の道が包蔵する実に多様な風土と歴史と文化をこれから勉強しつつ、自分たちの持っているものとの接点を見つけて、新しい体験をこの地、塩尻で実現して行きたいと思つている。

## 砂川流男踊り



三代目 砂川 清 (米子支部長)

砂川流の始まりは初代砂川清師の師匠で明治十四年米子市生まれの舞踊家で始祖中村千賀次師が当時のどじょう掬いに日本舞踊の所作を取り入れ、上品などじょう掬い男踊りを確立。また使用する箆も三角形の大型を使用、次にほおかむりの結び方、位置は男女の道行き仕用。併せて帯の結び位置、ビクの結び位置も日本舞踊スタイルと聞き、現在に至っています。砂川流では笑う場面がほとんど無いのが特徴、それ故に所作の一つ一つに説得力が要求され、タメ、メリハリが重要な要素です。特に初代砂川清師匠の泥鰌を追い込み、

滑って転び、立ち上がって袖を絞る際、本当に水の雫が落ちてくるかに見える所作は特に難しく生涯の目標としている課題の一つです。次に踊りの終了間際、早朝の薄暗い時刻に小川に出掛け、大魚で心弾んで帰る場面、まず歩きながら右真横斜め上方を見る。すると「あつ、朝日が昇ってきた、眩しい」と右手を横斜めに肘を伸ばして太陽を遮る。次いで客席を見て右手を下ろし前方を見て通常の歩き姿勢に戻り所定の位置に帰って一礼して終了とする。これも踊り全体の時刻説明であります。次いで小川の状況も普通の流れの掬い方、泥の深い水の余り流れない小川の掬い方と変化を付けてあり、歩き始めから終了まで一貫した日本舞踊スタイルです。以上、砂川流男踊りについて申し上げます。これからはも伝承に頑張っておりますので、会員の皆様のご認識とご理解よろしくお願い致します。

## 事務局からのお知らせ

安来節のしおり(平成二十五年度版)に誤りがございました。追加してお詫びいたします。

### 【追加】

出雲支部 P 132

◆二段

鼓 迫田八重子

関西支部 P 163 S 164

◆三段

踊 田中華代子

銭太鼓 田中重弘

田中華代子

◆二段

唄 田中重弘

踊 田中重弘

◆初段

唄 田中華代子

◆二段

唄 中山孝彦

踊 櫻井一三

◆三段

唄 櫻井一三

銭太鼓 櫻井一三